厚生労働行政推進調査事業費補助金

厚生労働科学特別研究事業

感染症の国際的流行等を踏まえた
外国人患者の受入環境整備に向けた研究

医療機関等における「やさしい日本語」の整備・普及に関する研究

令和３年度　分担研究報告書

研究分担者　武田　裕子

令和４（２０２２）年　３月

厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）

（総括・分担）研究報告書

研究分担者　武田　裕子　（順天堂大学大学院医学研究科　教授）

研究要旨

在住外国人が増加の一途を辿り、コミュニケーションのツールとして「やさしい日本語」が注目されている。しかし、医療現場では「やさしい日本語」はあまり知られていない。われわれは、2018 年より、普及・啓発活動を展開し、新型コロナウィルスの流行に伴い必要となった PCR 検査やワクチン接種の場面で役立つ「やさしい日本語」教材を提供している。そのなかで、さらなる普及には、「学ぶ」だけではなく「伝える」医療者の存在が必要と考えるようになった。そこで、医療者に「やさしい日本語」を自ら伝えたいという希望者を対象に研修会を開催し、その効果を検証した。それをもとに、各医療機関や地域における「やさしい日本語」導入・普及促進に向けて、そのプロセスが理解できる“医療機関のための「やさしい日本語」ガイド”や誰でもが研修に活用できる教材を作成した。

武田裕子（順天堂大学大学院医学研究科教授）
岩田一成（聖心女子大学現代教養学部教授）
新居みどり（特定非営利活動法人市民中心）
石川ひろの（帝京大学大学院公衆衛生学研究科）
津崎たから（ウェスタンミシガン大学大学院）
原尚子（学校法人日本教育財団首都医校）
有賀麻輝江（順天堂大学医学部医学教育研究室）

A.研究目的

医療機関において、近年増加している在留外国人の受入れを円滑に行うには、「やさしい日本語」の活用が有効といわれている。特に、新型コロナウィルス感染症の流行により、医療現場でのコミュニケーションはますますその重要性を増している。しかし、医療者には「やさしい日本語」はほとんど知られていない。あるいは存在を知っていても、医療機関への導入に必要な情報を得られず整備できていないことも多い。

われわれは、2018 年より普及・啓発活動を展開し、有志で医療×「やさしい日本語」研究会（以下、研究会）を立ち上げ、新型コロナウィルスの流行に伴い必要となった PCR 検査やワクチン接種の場面で役立つ「やさしい日本語」教材を提供している。そこで本研究では、アクションリサーチの手法を用い、医療・行政関係者・在留外国人支援関係者等を対象に研修会を開催することによって、医療機関等における「やさしい日本語」導入・普及プロセスの在り方について検討を行うこととした。その成果をまとめ、全国の医療機関・自治体で活用できる「やさしい日本語」導入・普及マニュアルの作成・公開が本課題の目的である。

B.研究方法

本研究は、次の 2 段階からなる。まず①研修会を開催し、その前後で参加者にアンケート調査を実施する。次に②研修開催のプロセスで収集した関係者のコメントやアンケートで得られた記述から、マニュアルに記載すべき事項を抽出し、医療機関向けの「やさしい日本語」マニュアルを作成する。

1.「やさしい日本語」研修会の開催

（1）研修会参加者の募集

『医療×「やさしい日本語」研究会』ホームページならびに、プライマリ・ケアを担う医師の学術団体である日本プライマリ・ケア連合学会や医学教育関係者が参加する日本医学教育学会でオンライン研修会の開催案内を送付した。

（2）研修会参加者へのアンケート調査実施

研修会を実施し、プログラムへのフィードバッグを参加者から得て、教育手法の改善・教材の開発を行った。参加直後だけでなく、半年～1 年経過後の状況も尋ねた。

（3）自施設で研修会を開催したい希望者向けのセミナー開催

所属機関に「やさしい日本語」を紹介・導入したい研修会参加者とともに、直面する困難や必要とするサポートを検討した。

（4）各医療機関でのセミナー開催

専門家による支援により、医療機関と地域の外国人コミュニティとの協働による学び合いのモデル・プログラムを策定し実施した。その過程で得られた気付きや、「やさしい日本語」導入のコツを文章化した。

2.「やさしい日本語」マニュアルの作成

上記（2）～（4）で得られたコメントから、研修会開催に向けてどのような情報提供が必要かを抽出し、マニュアルに記載する必要がある情報を整理した。

（倫理面への配慮）

調査実施に際し、順天堂大学医学部医学系研究等倫理委員会の承認を受けた（実施許可番号 E21-0007-M01）。

C.研究結果

1.「やさしい日本語」研修会の開催

（1）研修会の概要

研究会単独開催研修として、「やさしい日本語」研修を 4 回開催し（7/18、8/29、9/11、10/9）、67 名が参加した。参加者の職種別の内訳を表 1 に示す。

表 1.内訳

職種	合計
医師	12
歯科医師	0
薬剤師	4
看護師（助産師、保健師含）	8
医療機関事務職	12
日本語教育関係者	9
多文化共生・外国人支援関係者	5
その他	17
合計	67

(2)研修会前の準備

ファシリテータと外国人模擬患者とは事前に打合せをする（表 2）。まず練習問題とロールプレイのシナリオを解説し、次に外国人模擬患者とファシリテータそれぞれの役割を確認する。ロールプレイにおける外国人模擬患者の役割は、①まだ日本語の理解が十分でない外国人役を演じる、②参加者の「やさしい日本語」による説明のフィードバックをする、である。特にフィードバックでは、まず良かったところ、次に変更した方が良いところ、最後にもう一度、良かったところをコメントする。

表 2.事前打合せ確認事項

1．練習問題とシナリオの解説、難しい言葉の確認
2．外国人模擬患者の役割 ・まだ日本語の理解が十分でない外国人を演じる ・フィードバックをする時は、まず良かったところを述べる。次に直した方が良いところ、最後にもう一度良かったところを述べる
3．ファシリテータの役割 ・参加者の発言を促す ・ロールプレイ後は、まず参加者に感想を述べてもらい、次に模擬患者からフィードバックしてもらう

ファシリテータには、外国人の日本語教育の過程で用いられる用語は使わずに、参加者に発言を促す役割であることを確認する。ロールプレイ後に、まず参加者に感想を述べてもらい、その後、模擬患者からのフィードバックを得る。

（3）プログラムの内容

プログラムを表3に示す。自己紹介と動画視聴の質疑までに25分、その後、75分のグループワークを参加者5名ほどのグループに分かれて開始する。グループには、ファシリテータと外国人模擬患者が1名ずつ参加する。グループ内でアイスブレイキングを兼ねて再度自己紹介を行い、練習問題とロールプレイを行う。ロールプレイのシナリオには「ねん挫の患者への説明」「ねん挫の患者への処方」の2種類がある。参加者は練習問題、2種類のロールプレイのすべてを実施する。外国人模擬患者は途中で交代し、二人の外国人模擬患者に対する説明を体験する。

ロールプレイの後、グループディスカッションで意見交換を行う。最後に、参加者全員が、研修で得た学びや感想を述べて終了する。

表3.プログラム

10分	開会後挨拶・ファシリテータと外国人模擬患者自己紹介
15分	動画教材に関する質疑応答
5分	ブレイクアウトルームへ移動・グループ内で自己紹介
15分	練習問題－単語と文章の変換
20分	ロールプレイ１：シナリオ１説明
20分	ロールプレイ２：シナリオ２処方
15分	グープディスカッション ①医療で用いる「やさしい日本語」で気づいた点 ②「やさしい日本語」を医療者に普及する方策について
2分	メインルームへ移動
8分	グループ別発表　全体討議と質疑応答
20分	参加者からの感想
10分	ファシリテータからのコメント・模擬患者からの感想

（4）研修会参加者のアンケート結果

この4回の単独研修の参加者67名を対象に研修前と研修後に任意のアンケート調査を実施した。

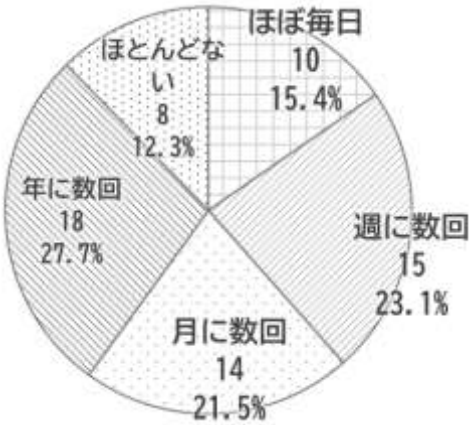
研修前アンケートの回答は65（97%）であった。「Q1.この研修会をどのように知ったか」で最も多かった回答は「“医療×「やさしい日本語」研究会”のホームページ」であった。（表4）

表4．研修会をどのように知ったか

医療×「やさしい日本語」研究会のHP	29(44.62%)
友人・知人から勧められた	11(16.92%)
Facebookなど SNS	9(13.85%)
その他（「職場での進め」「災害時医療救護活動研修会」「看護系雑誌で知った」など）	16(24.62%)

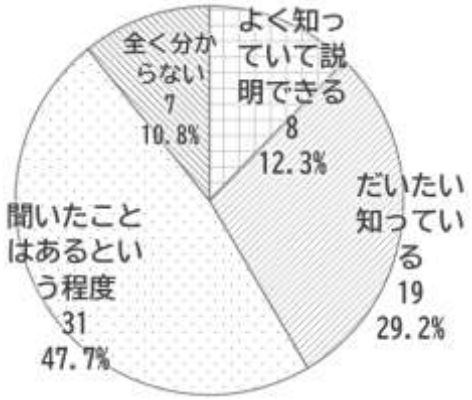
「Q2. 仕事や生活で日本語を母語としない方にどれくらいの頻度で出会っているか」は、「年に数回」が最も多かった。（図1）

図1．日本語を母語としない方に出会う頻度



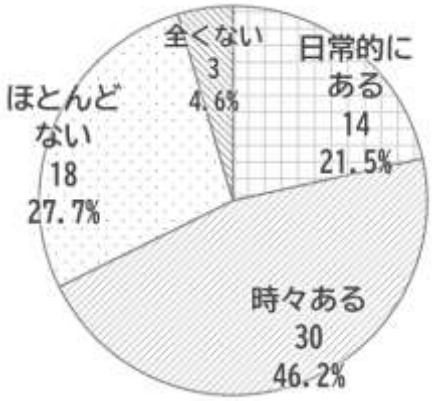
「Q3.「やさしい日本語」をどれくらい知っているか」は、「聞いたことはあるという程度」が最も多かった。（図２）

図２.「やさしい日本語」を知っているか



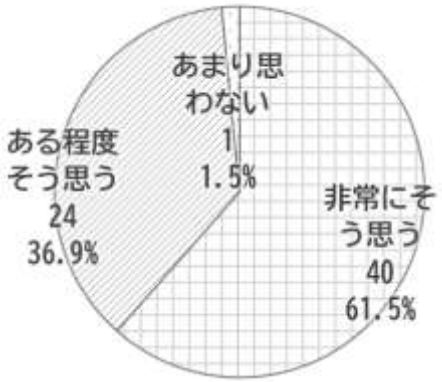
「Q4.「やさしい日本語」を実際に用いることがあるか」は、「時々ある」が最も多かった。（図３）

図３.「やさしい日本語」を使ったことがあるか



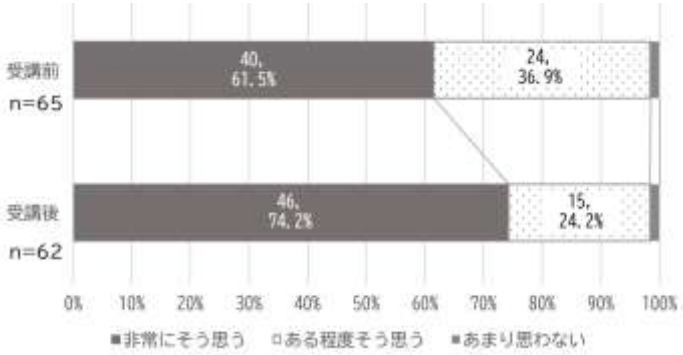
「Q5.「やさしい日本語」は自分の職場や地域で必要とされていると思うか」は、「非常にそう思う」が最も多かった。（図４）

図４.「やさしい日本語」は職場で必要と思うか



研修前後のアンケート項目には同質の質問項目が２つある。まず、前述の「Q5.「やさしい日本語」は自分の職場や地域で必要とされていると思うか」で、研修後の回答では、「非常にそう思う」が 46（74.2%）、「ある程度そう思う」が 15（24.2%）、「あまり思わない」が 1（1.61%）であった。「非常にそう思う」の回答が、研修前は 61.5%であったが、研修後は 74.2%に上がった。（図 5）

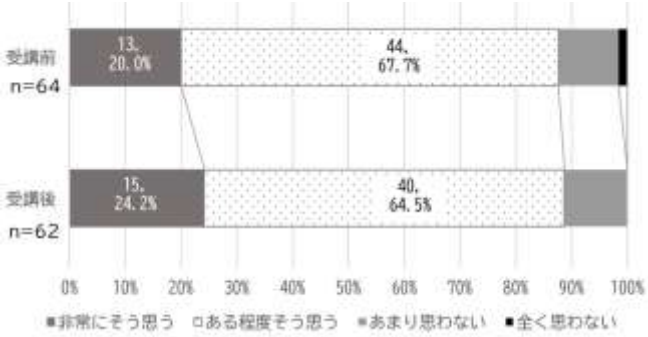
図５.「やさしい日本語」は自分の職場や地域で必要とされていると思うか



「Q.「やさしい日本語」を広めるための研修会やワークショップを自分の職場や地域で開催できそうか」という質問項目では、研修前は「ある程度そう思う」が 67.7%、「非常にそう思う」が 20.0%であった。研修後は、「ある程度そう思う」が 40（64.5%）、「非常にそう思う」が 15

（24.2%）と「非常にそう思う」の回答が微増した。（図 6）

図 6 .「やさしい日本語」を広めるための研修会やワークショップを自分の職場や地域で開催できそうか」



研究会単独開催研修 4 回、医療関連学会学術大会での研修会（第 12 回プライマリ・ケア連合学会および第 53 回日本医学教育学会大会）や岐阜大学医学教育開発研究センター（MEDC）主催のワークショップで行った「やさしい日本語」研修の参加者の感想（抜粋）を表 5 に示す。

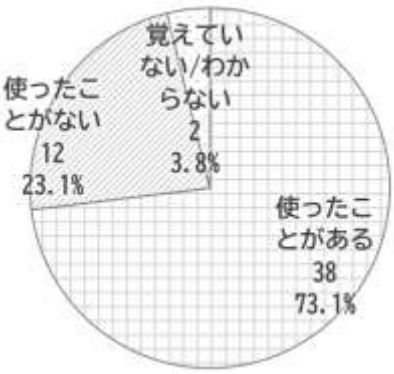
表 5 .参加者の感想（抜粋）

感想①：実際こうやって、日本語を母語としない患者さんとのコミュニケーションを体験してみることはとても大事だと思いました。「やさしい日本語」を使いこなすには、沢山の経験、語彙を含む知識が必要かと思いますが、「やさしい日本語」の存在・さわりを知っているだけで、今後のコミュニケーションは全く違ったものになるのではないかと思いました。
感想②：実際に外国人の患者さん役からのフィードバックを直接いただけることが大変勉強になった。患者さん役の外国人のフィードバックの姿勢がとても「やさしい」姿勢だったと思う。参加者が難しいと感じないよう「〇〇という言い方がとても分かりやすかった」等、良かった点にフォーカスしたフィードバックだったので「やってみよう」という気持ちになれると思う。
感想③：新しい体験で、ワークショップがすぐ終わってしまった。継続的にトレーニングしていければと思う。
感想④：進行がスムーズで、ワークの時間も長すぎず短すぎず、ちょうど良かった。
感想⑤：講師・留学生の方々から実際にフィードバックがいただけるのが非常に勉強になりました。
感想⑥：実際に言葉の置き換え練習をしていると時間が足りなかった。二部構成にはできないのでしょうか。出身国の多様性がもっとあるとよかった。
感想⑦：全 12 回の「コミュニケーションの理論と実際」科目の中の 1 コマ分を用いて来年度　より「やさしい日本語」教育を始めたいと思います。また教員 FD や、付属病院看護部の教育プログラムの一環として研修を実施することが可能と思います。

感想⑧：学生時代に日本語教育を副専攻し、留学先でも類似の教育（英語非母語話者への話しかけ方を米国人学生に教える）を行っていた経験から、「やさしい日本語」を医療系学生に教え、よりよい医療を目指すことの必要性は常々感じておりました。コロナ禍においては、これに加え、学生の動機付けという教育的側面からその重要性をさらに強く感じるようになりました。「国際医療が学べる」ことを特色として掲げてきた当（看護）学部に念願叶って入学したものの、海外渡航がままならず目標を見失いがちな学生に対し「国際的な活動は海外に出られなくとも行える」ことを示す格好の機会と思います。

12 月には、過去の研修参加者を対象にアドバンスセミナーを実施し、62 名が参加した。「やさしい日本語」研修を自施設で開催した体験を参加者が発表、さらに、3 つのテーマ（研修会運営、ファシリテータ、模擬患者養成）に分かれ、具体的な取り組み法をディスカッションした。
任意のアンケートでは「Q.前回の研修会参加後、「やさしい日本語」を実際に使ったか」は、「使ったことがある」が最も多かった。（図 7）

図 7．受講後に「やさしい日本語」を使ったか

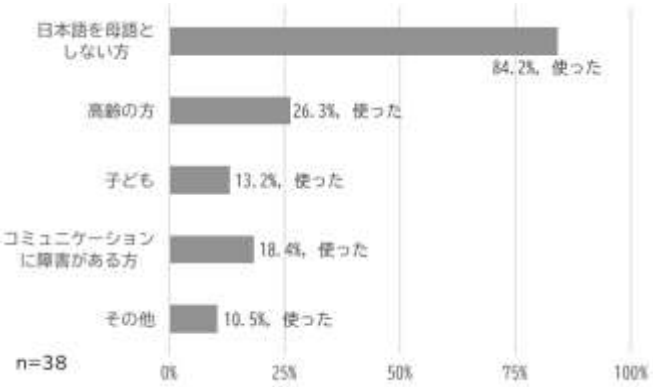


「やさしい日本語」を「使ったことがある」と回答した参加者 38 名に対しての質問、「Q.どなたに対して使ったか」（複数回答可）では、「日本語を母語としない方」が 32（84.2%）、「高齢の方」が 10（26.3%）、「コミュニケーションに障害のある方」が 7（18.4%）、「子ども」が 5（13.2%）であった。

表 6．「やさしい日本語」をどなたに使ったか

日本語を母語としない方	32
高齢の方	10
子ども	5
コミュニケーションに障害がある方	7
メールを書く時	1
勤務先（障害福祉）、障害者委託事業	1
看護学部の学生への授業	1
県・市職員向け研修、学生授業	1

図 8．「やさしい日本語」をどなたに使ったか



研修参加者には自施設で「やさしい日本語」研修の開催を促し、その開催の支援を積極的に行った。実際に行った 3 回の支援では、前述の外国人模擬患者養成の他、ファシリテータの養成、プログラム内容の相談、ロールプレイのシナリオの相談、Zoom 運営の支援に対するニーズがあった。主催者の感想（抜粋）は以下表 7 の通りである。

表７．参加者が自施設・地域で研修会を開催した時の感想

感想⑨：ネットが切れるなど小さなトラブルがいくつかあったが、武田先生・「やさしい日本語」事務局の支援もあり、予定の内容で開催できた。
感想⑩：Zoom だからこその利点を生かし、全員が直接外国の方とロールプレイできた。集合でなくても参加型の集会となり、職員にも高評価だった。
感想⑪：県の国際交流会ともつながりができた。私たちの医療を広げ、つながりを結ぶきっかけにしていきたい。
感想⑫：今後、各部署、各委員会や医学生・看護学生にも研修機会をもってもらえるよう呼びかける。

2. 研修会開催方法のマニュアルの作成

上記の研修会開催により得られたアンケート結果やコメントなどから、外国人模擬患者のリクルート、ファシリテータ向けの説明、研修資料の資料（教材）の提供などが必要であることが分かった。そこで利便性を考慮し、マニュアルとは別に付録として“医療機関のための「やさしい日本語」研修ガイド”を独立させることとした。

表８．マニュアルの記載内容

１７.「やさしい日本語」での対応
(1)「やさしい日本語」の必要性 (2)「やさしい日本語」のコツ (3) 医療現場での「やさしい日本語」導入に向けて―ロールプレイによる「やさしい日本語」練習― (4) 院内掲示の例（「やさしい日本語」の表示実例 (5) 教材や資料の紹介 これらを取りまとめ、“医療機関のための「やさしい日本語」ガイド”を作成した。

表９．付録の記載内容

医療機関のための「やさしい日本語」研修ガイド
・「やさしい日本語」の研修開催 ・プログラム例 ・練習問題と解答例 ・シナリオについて ・「やさしい日本語」解説（パワーポイント）資料 ・外国人模擬患者のリクルートと養成について ・ファシリテータの役割 ・「やさしい日本語」に関する資料 ・「やさしい日本語」以外のコミュニケーション

D.考察

1.「やさしい日本語」研修会の開催

「やさしい日本語」研修の実施はコロナ禍の影響を受け、オンライン開催を余儀なくされたが、より多くの地域の医療者に「やさしい日本語」を知る機会を提供できた。

「やさしい日本語」研修は、2 時間半のプログラムであるが、事前に動画視聴を参加者に促す反転学習の形式で行った。グループワークでは、医療面接の場面を想定し、実際に「やさしい日本語」を体験することができる学習者参加型のアクティブ・ラーニングとなっている。学習者参加型の研修は、受動的な学習スタイルである講義と異なり、企画・運営に入念な準備が必要となる。研修会後のアンケートには、「どのように研修を行えばよいか分からない」「外国人患者役をどう集め、どうトレーニングするのかが分からない」といったコメントが見られた。そこで、具体的な実施方法について学ぶ、「アドバンスセミナー」を開催することとなった。

研究会主催研修に参加した受講者が、後日、所属する医療・医育機関で研修会を開催する（「持ち帰り研修」）にあたり、企画者と研究会メンバーとでメールやオンライン会議を重ねた。当日のファシリテータを対象に 1 時間のセミナーを提供、模擬患者役となる外国人にもロールプレイを含めた準備セミナーを 1 時間行った。「アドバンスセミナー」では、そこで明らかになったポイン

トを体験者が報告する形とした。

質の高い研修開催が望ましい一方、現場の負担感が大きいと、実際の普及につながらない可能性がある。しかし、今回研修を主催した医療機関・団体では、参加者の満足度が高いことが動機づけになり、次の開催に向けて準備が進められている。一度でも研修を行うと、その必要性が理解され、また、研修に必要な人的資源や教材も整備されて 2 回目以降の研究は比較的容易に行えると推測された。

本課題で実施した研究会主催研修はオンライン開催であるために、地域在住の外国人のリクルートや地域でのつながりに制約が生じたが、「持ち帰り研修」として実施された大阪府堺市の病院の研修では地元大学の留学生 4 名の協力を得ることができた。新潟県上越市の国際交流団体の研修では、地域の医療通訳者 2 名の協力が得られた。徳島県の病院団体の学習会でも、国際交流センターの紹介で 2 名の地域在住外国人が参加し、実施可能な研修モデルであることが分かった。

2.「やさしい日本語」マニュアルの作成

今回の研究課題により、研修会参加直後だけでなく、半年～1 年経過後の報告を得ることができた。「やさしい日本語」の考え方に一度でも触れると、実際の診療場面での活用が始まり、少しのサポートで組織レベルでの取り組みも開始できることが分かった。また、継続的な学修支援やコンスタントな関りが必要であることを再認識した。そこで、本課題の成果物であるマニュアル内では、「やさしい日本語」の存在に着目されるよう背景等を概説し、実践的な「やさしい日本語」のコツを簡潔に伝えた。さらに、研修会開催過程でニーズが明らかとなった書き言葉としての「やさしい日本語」の例として、院内掲示の表示の実例を紹介した。これは、研修会参加者の所属する医療機関で用いられているものである。

実際に研修を実施し、「やさしい日本語」の医療機関への導入を促すために、今回、マニュアルとは別に“医療機関のための「やさしい日本語」ガイド”を作成した。研修に用いた教材を提供し、研究会がこれまで蓄積しホームページ上で公開している診療に役立つツールも連動して活用できる構成となっている。

本課題で実施した研修会の特徴は、外国人模擬患者の協力を得て行う参加型のワークショップにある。講演会と違って研修会 1 回あたりの参加人数は限られるが、「やさしい日本語」を用いることの効果と想像通りにいかない難しさを体験により学ぶ学修となっている。特に、当事者である外国人模擬患者による指摘や体験に基づくコメントが参加者に大きな印象を与え、その後の学修や「持ち帰り研修」への動機付けになっている。一方、外国人模擬患者にとっても、学びが得られる研修であり、医療機関受診の際に感じる敷居が下がることが研修後の感想として述べられた。

“相手に合わせて分かりやすく伝える”「やさしい日本語」は、「ことば」のスキルにとどまらず、相手に理解してもらいたい、伝えたいというマインドが不可欠である。本課題で実施した研修は、そのことの重要性を気づかせるものであった。そうした医療者の態度は、外国人診療に限らずあらゆる場面で求められるものである。

“「やさしい日本語」マニュアル改訂版”内に新たに加わった 17 章“「やさしい日本語」での対応”がそのことを伝えるものとなり、“医療機関のための「やさしい日本語」ガイド”が今後活用されることを期待する。

3. 今後の広がり

本課題を通して、医療従事者向けの研修に加え、教育関係者対象の研修も重視すべきであることが明らかとなった。日本プライマリ・ケア連合学会や日本医学教育学会におけるワークショップ開催により、希望者に学ぶ機会を提供し、学生・医療

者教育に直接従事する医療系学部教育者に「やさしい日本語」の取り組みを知ってもらえたのは、本研究の成果の一つと言える。今後、卒前教育・卒後研修カリキュラムに「やさしい日本語」を用いた医療コミュニケーション教育を取り入れる動きにつながることが期待される。

また、令和4年度から2年間、東京都の支援を受けて医療現場への「やさしい日本語」導入・普及事業を展開することとなった。今回の知見を活かし、オンライン研修を定期的（毎月第1・3・5土曜日午後2時―4時半）に提供する。研究会HPからどなたでも参加申し込みが可能である。そこで、本課題の成果物も併せて紹介し、研修参加者がそれぞれの勤務先や地域で「やさしい日本語」普及に取り組み、外国人患者の受入れ整備が進むことを期待する。

E.結論

本研究の調査結果と考察を踏まえ、“「やさしい日本語」マニュアル改訂版”内に新たに17章“「やさしい日本語」での対応”が加えられた。また、医療機関の研修の企画に関わる方を対象に、実践的な取り組みを促す目的で“医療機関のための「やさしい日本語」ガイド”を作成した。実施のプロセスやプログラム例を記載した。ガイドはA4サイズ6ページで、印刷して用いられることを想定し、コンパクトに内容をまとめた。コンテンツは、“医療×「やさしい日本語」研究会”がこれまで作成し公開している教材と連動しており、ウェブ上で参照しながら読み進めることができる。このガイドを用いて医療機関が「やさしい日本語」研修を開催することを期待するとともに、研修支援を継続していきたい。

F.健康危険情報（分担研究報告書のため未記載）

G.研究発表

１．論文発表

総説－１.『健康の社会的決定要因としての「日本語」－医療と「やさしい日本語」との出会い：研究会活動報告－　』（著者）武田裕子　　日本語教育179号（P.1-15）

総説－２．外国人診療こそプライマリ・ケア医の守備範囲－求められる「医療のワンストップサービス」.（著者）新居みどり，武田裕子　　プライマリ・ケア6(3);41-47,2021

総説－３．外国人にも伝わりやすい「やさしい日本語」－理解や聴こえに困難を抱える方々への情報保障－.（著者）武田裕子　治療．Vol.103 No.12；1508-1514（2021年12月）

エッセイ－１.「身近な隣人としての外国人支援」OPINION 医療界を読み解く［識者の眼］武田裕子,No.5059 (2021年04月10日発行) P.67 日本医事新報 https://www.jmedj.co.jp/journal/paper/detail.php?id=16772

エッセイ－２.「新型コロナワクチン接種通知に見る健康の社会的決定要因（SDH)」OPINION 医療界を読み解く［識者の眼］武田裕子,No.5066 (2021年05月29日発行) P.56 日本医事新報 https://www.jmedj.co.jp/journal/paper/detail.php?id=17203

２．学会発表

①多文化共生時代の外国人診療は英語よりも「やさしい日本語」：You Tube教材の紹介
（演者）武田裕子、石川ひろの、岩田一成、新居みどり（2021年5月21日　第12回プライマリ・ケア連合学会　一般演題発表）

②『医療×「やさしい日本語」研究会』による医療関係者のための「やさしい日本語」研修
（演者）有賀麻輝江、原尚子、津崎たから、石川ひろの、新居みどり、岩田一成、武田裕子（2021年5月21日　第12回プライマリ・ケア連合学会　一般演題発表）

③医療で用いる「やさしい日本語」（インタラク

ティブセッション４）
（ファシリテータ）武田裕子、石川ひろの、岩田一成、新居みどり、有賀麻輝江（2021 年 5 月 21 日　第 12 回プライマリ・ケア連合学会　インタラクティブセッション）
④「やさしい日本語」研修の開催と受講者の動向：医療関係者のために「やさしい日本語」普及のための試み
（演者）有賀麻輝江、原尚子、津崎たから、石川ひろの、新居みどり、岩田一成、武田裕子（2021 年 7 月 30 日　第 53 回日本医学教育学会大会　一般演題発表）
⑤外国人診療に役立つ「やさしい日本語」でコミュニケーション教育（ポストカンファレンス企画ワークショップ２）
（演者）武田裕子、石川ひろの、岩田一成、新居みどり、有賀麻輝江、原尚子、津崎たから（2021 年 7 月 3 0 日　第 53 回日本医学教育学会大会
一般演題発表　ポストカンファレンス企画）

H.知的財産権の出願・登録状況
なし